

エスノグラフィーとは、人びとが実際に生きている現場を理解するための方法論です。見知らぬ土地で謎と出会ったとき、ふだんの生活や仕事の現場で既存の考え方が通用しない問題につきあたったとき、エスノグラフィーがそれを解き明かす道を開いてくれるかもしれません。

エスノグラフィーをたとえるなら、新しい扉を開いて、その向こうにそれまで知らなかった風景を発見する方法です。

エスノグラフィー入門 〈現場〉を質的に研究する 小田博志

アメリカ研修について、巻頭言を書いてほしいと洞口先生に言われました。その時に、思い出したのは文部科学省（当時は文部省）の「若手海外教員派遣研修」でニュージーランド（以下、NZ）に約3カ月にわたり、研修に行ったことです。もう30年も近く前のこととなります。1カ月半ずつ、ホームステイをしながら高校での学校研修と、NZ国内を回りながら人と文化に触れる旅といった内容でした。その際の私の報告書の一部を紹介します。

私は、人口約4万6千人のヘイスティンクス郊外の住宅地でホームステイをおこなった。私のホストファミリーのキース家は、夫婦子供（長女と長男）の4人家族であり、他に犬一匹・猫一匹がいた。長女と長男は大学生でウェリントンに住み、月に何度か週末に帰ってくる程度であったので、ふだんは夫婦二人であった。

ホスト・ファーザーのケンは、私の訪問校ハヴェロック・ノース・ハイスクール（以下、HNHS）の英語教師である。英語教科の中で、英語科目と演劇科目を教えており、演劇科目の主任である。NZには、「6. 学校研修」で紹介したとおり、英語教科の中に「演劇」の科目がある。ケンは、NZの高校演劇指導者の第一人者であり、何度もHNHSを全国大会に導いている名伯楽である。全国大会を主催し、自分の学校で全国大会をおこなっている。その準備に一年中かかるため、大変忙しい生活を送っていた。NZ人でもこんなに忙しい人がいるのかと思ったほどである。主催者であるが、雑務もやらなければならない、いつも封筒にいろいろな案内を詰めて、NZ中に送っていた。私も手伝いをやらされた（これが結構大変で、自分のレポートを作成したり、授業の準備をしながら、手伝われるのにははっきり言って困った。）

ホスト・ファーザー、ホスト・マザーのケンとアネタは、アイルランド出身でケニアで二人とも教師をしていた時に知り合い、NZにやってきたというコスモポリタンだった。初めはなんで、何の得にもならないのにホストファミリーなんか引き受ける人がい

るのかなと、疑問に思っていた。自分だったら絶対にホストなんか引き受けないと思っていた。でも、ケンとアネタと付き合ううちに「ああこの人たちにとって、異文化と知り合うことが喜びなんだな」と気づいた。それと同時に、異文化と接することを喜びと感じる自分がいた。

まず最初に感じたのは、「なんとつつましい生活をしているんだこの人たちは」、という事だった。とにかくものを大事に使っていた。でも、それが新鮮だった。年季の入った家具、ピアノ、サングラス、ひじに穴の開いたセーター、プラスチックの蓋にひびが入っていてセロテープで止めてあるランチボックス、エトセトラ……。 (あんなセーターやランチボックスは今の日本で恥ずかしくて使えない) 一つ一つを見ると、とてもいいものだということがわかるのだが、どれも古かった。でもかっこよかった。家族、子ども、教育、音楽、英語、すべてが僕にとって新鮮だった。そしてそこからは哲学が感じられた。いろいろなことを教わったような気がする。何に対しても「哲学」を持っていた。やっぱり、個人個人としての「哲学」では西洋人に僕たちはかなわないなど、強烈に感じた。

教師として印象に残ったのは、ホスト・マザーのアネタ (前述したとおり、彼女も長い間英語の先生をケニアと NZ でしており、教育に一家言を持っている。彼女はイギリスで教育を受けた。) の話だった。彼女によると、イギリスでも昔は、授業の初めと終わりは立って挨拶をし、目上の人や他人を尊敬するように教育されたという話であった。ところが、イギリスでも NZ でもいまでは、目上の人や他人を尊敬するような教育はされていないと彼女は嘆いていた。それに、家庭や学校でのしつけが軽視されているとも言っていた。結局、こどもの教育に、「しつけ (discipline)」が必要なことは、国や時代を問わない真理なのだという事を再認識できたことは、僕にとって大収穫だった。

ホームステイの一か月半は、このように日本と NZ の「違い」と「同じところ」を様々な角度から強く感じることでできた一か月であった。

30 歳くらいのまだまだ未熟な教師の今読むと恥ずかしいくらいの料簡の狭さです。しかしながら、初めて訪れた異国で、慣れない仕事をやり (当時のオセアニア地区でトレンドだった日本語教育の ALT)、知らない家族の中で (もちろんとても親切にしてくれましたが)、いわば、もがきながらの正直な思いがつづられています。異国での生活は、未知のものに出会い、苦労しながら、様々な発見・気づきにより、成長した未知の自分に出会うものなのではないでしょうか。今読み返してみるとこの経験が後の私の学術研究の方法論になる質的研究に取り組む萌芽の一つになっていたのかなとも思えます。

昨年度の「アメリカ研修報告書」を読ませてもらいました。参加した生徒のみなさんは、研修を通じて様々な発見・気づきをする中で、自分自身を見つめています。上記の私

よりももっともっと若いこの高校2年生という大切な時期において、本プログラムのアメリカ合衆国ボストンでの経験はかけがえのないものだということがよくわかります。この研修での経験はすぐに役立つこともあるし、何年かたってから役立つことにもなるでしょう。今年の「アメリカ研修報告書」にもたいへん期待をしております。

結びになりますが、生徒の貴重な経験となったアメリカ研修に送り出し、支えていただきました保護者の皆様、多大なご支援をいただきました仙台二高奨学会、そして充実した研修プログラムを企画していただいた(株)ISAの皆様に心より感謝申し上げます。